

## Corneille の 《Suréna》 について

村 瀬 延 哉

### (1)

Corneille 最後の戯曲《Suréna》は、1674年11月末か12月初めに、Hôtel de Bourgogne 座で初演された。この間の事情を伝える資料は、ほとんど残されていない。しかし、作品が失敗に終わったことは、唯一の資料とも言える Pierre Bayle の手紙からしても間違いない<sup>1)</sup>。

同年12月末か翌年1月初めに、同劇場で、Racine の《Iphigénie》が上演されるが<sup>2)</sup>、これと同時に、Corneille の作品は印刷にまわされている<sup>3)</sup>。つまり、わずか一ヶ月ばかりで、《Suréna》は上演を終了した。一方、《Iphigénie》は、Racine の作家生活のうちでも、最大級の成功を収める。Corneille は、以後劇作に手を染めない。老作家の言葉を借りるなら、

J'ai pris congé du Théâtre; ma poésie s'en est allée avec mes dents<sup>4)</sup>

(私は芝居に別れを告げた。私の歯が抜けるのと一諸に、劇詩も私から去って行った)

Corneille は、作品の冒頭にきわめて短い解題をつけ、出所が Plutarque であることを示した。以下《Suréna》の粗筋を述べておく。

\*

舞台は紀元前一世紀。Orode 二世の下で全盛をきわめた西アジアの国家バルチア。隣国アルメニアの王女 Eurydice は、明日に迫った Orode の息子 Pacorus との結婚を、複雑な心境で待っている。

ことの起りはローマとバルチアの戦い。ローマの将軍 Crassus は、Eurydice の父に援助を求め、Orode も同じ目的で、臣下の将軍 Suréna を、彼の宮廷へ派遣する。結局王はローマに味方し、Suréna は失意のうちに宮廷を去る。しかし、この間、彼と Eurydice は、深い恋心を抱くようになっていた。

Suréna は、Crassus 父子を破って、バルチアに勝利をもたらす。一方、

パルチアとアルメニアの間にも、両国の王子、王女の結婚を条件に、和平が成立する。Suréna への思いを心に秘めたまま、Eurydice は政略結婚の犠牲となる決意を固める。だが、Orode が計画している、王の娘 Mandane と Suréna の結婚だけは承知できない。

Suréna の妹 Palmis と Pacorus は恋仲であった。しかし、今では王子は完全に Eurydice に心移している（一幕）。

Pacorus は婚約者の愛を信じられず、悩んでいる。Suréna を呼んで、彼女が誰か別の男性に好意を寄せている様子はなかったかと尋ねるが、彼から有効な答を得られるはずがない。

追求の手は Eurydice に向けられる。彼女は、名前こそ明かさないうえ、恋人の存在を認める。と同時に、このような告白を強要された代償として、結婚の延期を一方向的に通告する（二幕）。

Suréna に信望が集中するのを快く思わない Orode は、彼を娘の婿にして、王権の安泰を図ろうとする。しかし、將軍は王の申出を懇懇に断り、逆に妹を王子の妻にするよう求める。

Orode はまた、Palmis の口から、王女の恋人の名を聞き出そうとして、果さない。だが、一同の頑な拒絶と沈黙は、王に Suréna と Eurydice の関係を確認させるに至る（三幕）。

兄の身を案ずる Palmis の説得も、嫉妬に狂った Pacorus の脅迫も、恋人達の決心を覆すことができない（四幕）。

遂に王は、王子と Eurydice または將軍と Mandane の、少なくとも一組の縁組が成立しない限り、將軍を宮廷から追放すると宣告する。死を覚悟した Suréna は追放を受入れる。Palmis に説き伏せられた Eurydice が、恋人と Mandane の結婚に同意した時、Suréna の死が報じられる。宮廷を出た瞬間、何処からともなく矢が射られ、彼の心臓に命中した。この知らせを聞いて、Eurydice は、悲しみの余り絶命する（五幕）。

(2)

《Suréna》は、Corneille の作品では異例なほど単純な構成をとる。まず、一幕から三幕まで、各幕三場で構成されており、場数が少ない。また各場は、五幕三場を除いて、ほとんどが一對一の対話形式をとる。各幕に、一

幕通しで登場する人物がおり、その人物が、各場毎に相手を取り代えながら、対話を続ける。以上のことを図式化すると、次のようになる。

((I)) Eurydice

(1) Ormène (2) Palmis (3) Suréna

((II)) Pacorus

(1) Suréna (2) Eurydice (3) Palmis

((III)) Orode

(1) Sillace (2) Eurydice (3) Palmis

((IV)) Eurydice

((VI)) Pacorus

(1) Ormène (2) Palmis (3) Pacorus (4) Suréna

((V)) Eurydice

(1) Orode (2) Suréna (3) Suréna (4) Palmis

(5) Palmis

Palmis

Ormène

(上段のローマ数字が幕、下段の数字が場を示す。また上段に一幕通しで登場する人物、下段に対話者が記されている。ただし、四幕四場だけは、この幕の最初から登場していた Eurydice が姿を消し、Pacorus と Suréna の対話となる。Ormène, Sillace は、各々 Eurydice, Orode の侍女、部下で主人の話の聞き役。)

《Suréna》は動きの乏しい、静的な印象を与える劇である。その原因の一つは、このような場面構成の単純さにあろう。だが、形式と内容とは切り離し難いものだから、形式の単調さは、結局のところ、ストーリーの単調さにつながる。我々は、ストーリーの単調さを示す証拠として、次の二点を挙げておきたい。

第一に、これは、宮廷という密室の中で繰り広げられるドラマである。五人の主な人物の対話が引き起す各人の反応以外、劇を進行させるものはない。確かに、《Suréna》の直前に書かれた《Tite et Bérénice》や《Pulchérie》も、宮廷内の対話劇という意味では、同様である。しかし、これらの作品では、宮廷という密室は、わずかながらでも外界に開かれている。Tite にしろ Pulchérie にしろ、元老院の意向を無視して何事も決定できない。劇の進行は、絶えずこの外界の声によって左右される。

王が、国内で信望を得た有力な人物を迫害するという設定からいえば、

1651年に上演された《Nicomède》が、《Suréna》によく似ている。だが、苦境に立たされた Nicomède は、最後に民衆の蜂起によって救われる。

《Suréna》には、元老院の声も、民衆の動きも伝わってこない。

第二に、主要人物の問題に対処する姿勢が、舞台に登場した時から幕が降りるまで、ほとんど変化しない。彼らは自分の見解の内に頑なに閉じこもって、そこから一步も出ようとしない。その結果、暴君が、被害者をじわじわと迫害し、破滅させる受難劇風の流れが一貫することになる。そもそも、Corneille 劇本来の展開は、人間の理性と意志に対する強い信頼に支えられているはずであった。様々な波乱を経ながらも、理性と意志の力で葛藤が解決され、平和な幕切れが訪れるのである。だが、《Suréna》では、主人公は空しく大地を血に染めて、迫害が完了する。一体、Suréna の《単調なる》悲劇は、何故避けられなかったのか。我々は以下で、この原因を主要人物の行動と心理を分析しながら、明らかにしていきたい。

### (3)

Corneille の晩年の作品は、行動をしかけるのが主人公以外の人物、多くは仇役、悪人であって、主人公はそれに受身に対応するだけという傾向を持っている。《Suréna》は、この傾向の最たるものと言えよう。

では、主人公の受動性はどこから生れたのか。Suréna が行動力を失ったのは何故か。それは何より、彼の忠誠心のせいであり、アナクロニズムな言い方をすれば、骨の髄までしみ込んだ絶対主義的思考のせいである。

Je n'ai goutte de sang qui ne soit à mon roi ;<sup>5)</sup>

(私の血の最後の一滴まで国王に捧げられるべきものである。)

彼は、絶大なる富と名声を誇り、常時一万の部下をひきつれて移動した<sup>6)</sup>。国内ナンバー2の地位にある将軍に、その意志さえあれば、力によって王に反抗することも可能であったろう。だが、服従の精神が、自らの手で、この道をとざした。

従って、Mandane との結婚を示唆された時、最終的にはきわめて限られた選択肢しか残されていない。拒絶して、事実上の自殺を選ぶか。己れの心情を犠牲にして君命に従うか。しかも、この際、直接ことを決するのは主人公の意志でなく、女性の影響力である。開幕後間もなく Eurydice が、

N'épousez point Mandane<sup>7)</sup>:

(マンダンヌとは結婚しないで下さい。)

と要求しているからだ。主人公が彼なりの選択を行ったとしたら、王の意志と恋人の意志と、どちらにより忠実であるべきかという点についてののみである。

ところで、この点に関する主人公の選択は、Corneille 的世界の価値観に、決定的変化をもたらしたと言わざるを得ない。個人の利害より、国家、家族、宗教といった共同体の利益や大義を優先させるのが、Corneille 劇の主人公の常道であった。《Suréna》において初めて、個人にとっての価値が共同体の価値より上位を占める。

この価値の逆転が特に明白になるのは、Suréna が王子に、王権にも制約があることを、述べる件である。

Sans faire un nouveau crime, oserai-je vous dire / Que l'empire des  
cœurs n'est pas de votre empire, / Et que l'amour, jaloux de son auto-  
rité, / Ne reconnaît ni roi ni souveraineté?<sup>8)</sup>

(さらに罪を重ねるのを恐れずに言わして頂けるなら、心情の世界はあなた方の支配の及ぶところではないのです。恋は自分を第一に考えたがるもので、王も王権も認めはしないのです。)

Suréna の反抗は、王の権力も人の心まで自由にできないと主張するだけであって、それ以上に公然と力に訴えた不服従を支持するものではない。その限りにおいて、Suréna は依然として絶対主義の信奉者である。しかし、彼の支持は、王権もまた誤ちを犯し、個人の幸福を妨げることがあるという苦い認識を一方に秘めている。このことは、主人公と王が強い信頼関係で結ばれていた《Le Cid》や《Horace》では、到底考えられない。

Suréna という人物で、特に印象的なのは、彼が時折口にする深刻な厭世思想である。Corneille の主人公達を支えてきた価値の世界が、彼の内部で音をたててくずれ落ちる。国家という虚構が、かつてのような絶対的価値を持ち得ないのは、今見た通りである。家族とか血縁とかいったものも同様である。Eurydice が、妻帯して高名な Suréna の家系を後世に残すよう勧めると、彼は言下にこれを退ける。

Que tout meure avec moi, madame; que m'importe / Qui foule après ma  
mort la terre qui me porte? / Sentiront-ils percer par un éclat nouveau,  
/ Ces illustres aïeux, la nuit de leur tombeau? ... Quand nous avons

perdu le jour qui nous éclaire, / Cette sorte de vie est bien imaginaire,  
/ Et le moindre moment d'un bonheur souhaité / Vaut mieux qu'une si  
froide et vaine éternité.<sup>9)</sup>

(姫、すべてが私と共に死に絶えればよいのだ。私の死後、今私の生きている大地の上を誰が歩こうと知ったことではない。その高名な先祖なら、墓場の間に新たな光がさしこむのを感じるとでもいうのか…

我々を照らす光が消えた後の生などは、まったくの空想にすぎない。切望された幸福の瞬間は、どれほど短かかろうと、かかる冷やかな空しい永遠より値打がある。)

こうして、一種徹底した個人主義者、ある意味で刹那主義者としての主人公の相貌が明らかになってくる。

確かに、Suréna にとっても、他の Corneille の主人公と同様、社会的かつ個人的なモラルともいえる gloire (=名譽) の持つ意義は重要である。

J'ai vécu pour ma gloire autant qu'il fallait vivre,<sup>10)</sup>

(私は、生ある限りは、己れの名譽のために生きた。)

だが、彼が死後の世界に示した無関心からすれば、《己れの名譽のために生きる》とは、後世まで残る輝しい名聲を得ることではなく、今の瞬間を、己れの良心に恥ぬよう生きるという程度の意味で使われていると考えられる。

従って、この価値の廢墟に残された最後の生の目的は、心情の自由つまり恋愛である。主人公一流のニヒリズムが、彼を恋愛至上主義者にした。

※ ※ ※

Suréna を死に至らしめた間接的責任は Eurydice にある。王は彼を許す条件として、彼女と Pacorus または主人公と Mandane のどちらか一方の縁組が成立することを挙げた。Pacorus との結婚を拒絶し、早々と Suréna に Mandane との結婚を禁じたのは、既に述べたごとく彼女である。さらに彼女は、Mandane に代る恋人の妻を、自分の手で見つけたいと願う。<sup>11)</sup> 五幕まで彼女の決意は揺らがない。大詰めの四場になって、ようやく態度を軟化させるが、時既に遅く、主人公は暗殺される。

彼女の頑固さには、いささか理解に苦しむところがある。Mandane に恋人を渡すまいとする執着心は、愛情の深さを物語るのであろうか。しかし、これが、必然的に恋人の死を意味する以上、兄の命を救おうとする Palmis の非難は、当を得ている。

Aurait-on jamais cru qu'on pût voir quelque jour / Les nœuds du sang plus forts que les nœuds de l'amour<sup>12)</sup> ?

(肉親の絆が恋の絆より強いと知らされる日が来ようとは、誰も思わなかったでしょう。)

もっとも、Eurydice の対応の仕方は、Corneille 晩年の作品を知る者には、少しも奇異でない。Sophonisbe や Bérénice の先例があるからだ。二人は、恋人との結婚が不可能と分ると、進行中の彼らの縁談をおちこわし、彼らの妻を自身で選ぶことに、自尊心の慰めを見出そうとする<sup>13)</sup>。この嫉妬と支配欲の入り混った女性心理の描写が、現代の読者を満足させるものかどうかは今問わない。

ともあれ作者は、彼の愛着する手垢のついた手法を、愛の悲劇を完成させるために、つまり主人公が愛故に、死へ直進せざるを得ない布石として利用したのである。

このように女主人公は紋切型に陥って、作者の創造力の衰えを感じさせる嫌いがある。しかし、一方で彼女は、所謂 Corneille らしさを最もとどめた人物でもある。

彼女にとって至上の価値は、Suréna 同様恋愛である。Corneille 劇の多くの女性達のように、王位が彼女の目を眩ますことはない。主人公が、Pacorus と結婚して王妃の位に着くよう勧めた時、彼女は、

J'envisage ce trône et tous ses avantages, / Et je n'y vois partout, seigneur, que vos ouvrages, / Sa gloire ne me peint que celle de mes fers, / Et, dans ce qui m'attend, je vois ce que je perds.<sup>14)</sup>

(私が、帝位とその諸々の恩典に思いを巡らす時、何もかもが、あなたのお力の賜であると分るのです。帝位の名誉も、私の恋がいかに名誉あるものかを教えてくれるだけです。私の得ようとしているものが、失うものの大きさを知らせてくれます。)

と答える。祖国の平和という大義でさえ、恋しい男を目の当りにすると、価値を失う。

Pour le bonheur public, j'ai promis: mais, hélas! / Quand j'ai promis, seigneur, je ne vous voyais pas. / Votre rencontre ici m'ayant fait voir ma faute.<sup>15)</sup>

(民の幸福のため、私は結婚を約束した。しかし、ああ！私が約束した時、あなたは私の前にいなかったのです。ここであなたと再会して、

私の犯した誤ちが分りました)

では Eurydice の関心が、それほど大切な恋人の命を救うことに必ずしも向けられていないように見えるのは何故か。恐らく最大の理由は、彼女のストイックな死生観にある。

Et rien n'en est à craindre alors qu'on sait mourir.<sup>16)</sup>

(死ぬ術を心得ていれば、何も恐れるにあたりません。)

これは、主人公の死生観とも一致する。Pacorus の脅迫に対し、彼は、

J'aurai soin de ma gloire; ordonnez de mes jours.<sup>17)</sup>

(私は、自分の名誉のことを気にかけるから、あなたは、私の命を好きなようになされば宜しい。)

と答える。

ある意味で、このような潔すぎる態度が、彼らの不動性つまり環境への適当な反応の欠如を生み出したのである。生への執着のないところに、現実との激しい格闘は生じない。Eurydice は、問題の解決を、恋人の命を救うことより、彼と共に死ぬことに求めようとする。

et ce mortel ennui / N'ose plus aspirer qu'à mourir avec lui.<sup>18)</sup>

(この激しい絶望の故に、もはや彼と一諸に死にたいと望むだけなのです。)

Eurydice の見せ場は、二幕二場の Pacorus との対決にある。しかし、ここでも彼女は、恋人と自分の身の上に迫る危険を無視するかのようである。彼女の誇り高さは、本心を偽わるのを好まぬばかりか、一種挑発的な言動となって現れる。王子を揶揄し、彼を愛していないと自ら認め、恋の相手が、彼の知る思いがけぬ人物かもしれないと仄かしたりする。

確かに常識的に言えば、彼女の言動は無謀である。破滅を招く無分別とも非難できよう。だが見方をかえれば、この小気味よい大胆さに、Cornelle 的人物の真骨頂が窺える。権威を前にして、自分の心を曲げない勇氣は感動的である。この強さが、既に述べた死の覚悟によって支えられていることは言うまでもない。

※ ※ ※

Pacorus は卑怯な、共感を全く呼ばない人物として描かれている。彼の卑劣さは、たとえば、Palmis を捨て Eurydice と結婚するのに、国家間の平和という大義を抜きなく利用している点に窺える。

Ma légèreté seule a fait ce nouveau choix: / Nulles raisons d'Etat ne

m'en ont fait des lois; / Et pour traiter la paix avec tant d'avantage, /  
On ne m'a point forcé de m'en faire le gage: / J'ai pris plaisir à l'être,<sup>19)</sup>

(私の心変わりだけが、この新たな選択の動機だった。国益上の理由が、私を強制した訳ではなかった。あのような優位に立って和平を締結する以上、人質となる必要は全くなかったからだ。ただ私は、そうなることが喜しかった)

表面的に見るなら、Surénaの悲劇は、Pacorusの嫉妬に、すべての端を発している。彼が、王やEurydiceの説く、国益のために行われる王家の結婚に私情は禁物という原則を守り、彼女の恋に触れようとしなかったら、最悪の悲劇は避けられたかもしれない。

Orodeは、王子に比べれば、はるかに卑劣なところが少ない。彼が、主人公の意に添わぬ結婚を強行しようとして、列挙する理由は、必ずしも道理を欠いていない。<sup>20)</sup> Orodeは分別に富んだ君主と言える。しかし、その彼にも決定的な弱点がある。Surénaに対して抱いている、権力者としての嫉妬である。

Qu'un monarque est heureux quand parmi ses sujets / Ses yeux n'ont point à voir de plus nobles objets, / Qu'au-dessus de sa gloire il n'y connaît personne / Et qu'il est le plus digne enfin de sa couronne<sup>21)</sup>!

(臣下の間に、自分より高貴な者を見出す必要がなく、名誉において、自分に優る人物を知らず、自分が現に戴いている王冠に最もふさわしい君主は、何と幸せだろう!)

Surénaは、Mithradateに代ってOrodeを王位に着けた功労者である。Orodeが、アルメニアを包囲したまま身動きがとれなくなっている時、ローマ軍を破って、パルチアを栄華の絶頂へ導いたのも彼の力である。彼の名誉は王を凌ぎ、蓄えた富と武力は、王を脅かすに足る。

Orodeの嫉妬と、実際に王位を奪われるのではないかという不安は、一度はSillaceの腹黒い計画を否定しながらも、いずれそれを実行せざるを得ない王の未来を予見させる。

Seigneur, pour vous tirer de ces perplexités, / La saine politique a deux extrémités. / Quoi qu'ait fait Suréna, quoi qu'il en faille attendre, / Ou faites-le périr, ou faites-en un gendre, ..... Il n'est point de milieu.<sup>22)</sup>

(陛下、この窮状を脱する賢明なる政策として、二つの非常手段が可

能であります。シュレナがどれほどのことをし、今後彼にどれほどの期待がかけられるにしろ、彼を亡き者にするか、婿になさるかです…  
…中間策はございません。)

Orode は、息子と同様、Suréna への嫉妬を最後まで捨てきれず、暴君への道を突き進むことになる。

※ ※ ※

四人の主要人物を、一種金縛りにして、破滅へと至らしめた構図は、以上で明らかであろう。一方には、恋愛至上主義者の Suréna と Eurydice がおり、他方には、嫉妬に苛まれる Orode 父子がいる。迫害する側も、される側も、己れの感情にあくまでも忠実であって、譲歩する気など毛頭ない。もし、Suréna が Mandane との、Eurydice が Pacorus との結婚に同意していたら、あるいは、彼女が、Suréna と Mandane との結婚をもっと早く許していたら、悲劇は生れなかったかもしれない。Pacorus が Palmis と結婚し、Orode が、《Cinna》の Auguste のような度量の広さを示して、Suréna と Eurydice に自由を与えていたら、劇はハッピー・エンドを迎えていただろう。しかし、四人のうち誰一人として、自らこのような犠牲的行為を行おうとした者はいなかった。<sup>23)</sup>

いや、そればかりではない。終幕近くの Suréna の台詞は、この劇には最初から、悲劇を回避する余地がなかったことを示している。観客は二組の結婚、あるいは少なくとも一組が成立するなら、主人公の命が助かるという前提に立って、劇の進展を見守っている。だが、実際には、このような二者択一の可能性はなかった。Suréna が結婚を承諾していても事態にさしたる影響はなかったのである。

Madame, ce refus n'est point vers lui mon crime: / Vous m'aimez; ce n'est point non plus ce qui l'anime. / Mon crime véritable est d'avoir aujourd'hui / Plus de nom que mon roi, plus de vertu que lui; / Et c'est de là que part cette secrète haine / Que le temps ne rendra que plus forte et plus pleine. / Plus on sert des ingrats, plus on s'en fait haïr<sup>24)</sup>:

(姫、この拒絶が、王に対する私の罪という訳ではないのです。あなたは私を愛していますが、これもまた、彼を焦立たせる理由ではありません。私の本当の罪は、今日王より多くの名声を得、多くの勇気を持っている点にあります。そこから、この秘められた憎しみが生じたのであり、時と共に、それは、さらに強くさらに完全なものになるだ

けでしょう。思知らずには、尽せば尽すほど憎まれるのです。)

仮に Suréna が Orode の婿になったとして、王の疑い深い嫉妬心を鎮められるだろうか。王位のためなら、肉親の血を流すことも厭わぬ王の家系に加わることは、人知れず Suréna を暗殺する機会を、提供するだけではないだろうか。

Quoi! vous vous figurez que l'heureux nom de gendre, / Si ma perte est jurée, a de quoi m'en défendre, / Quand, malgré la nature, en dépit de ses lois, / Le parricide a fait la moitié de nos rois, / Qu'un frère pour régner se baigne au sang d'un frère, / Qu'un fils impatient prévient la mort d'un père<sup>25)</sup> ?

(何だと！私を亡き者にするという誓いがたてられている時、婿の幸運な肩書が、それを防ぐのに役立つとしても思っているのか。自然の情と、摂理に反して、我らの王の大半は、肉親殺しによってその地位に着いた。支配するために、弟が兄の血を浴び、息子が待ちきれずに、父の死を早めるのだ。)

《Suréna》は、愛の悲劇であると同時に、嫉妬の悲劇である。それは、嫉妬が Orode 父子の心を強く支配しているという意味だけではない。彼らに迫害される主人公が、権力者の心に宿るこの感情の全能性を認めて、もはやそれに抵抗しようとししないのだ。嫉妬を迫害者の内に仮定することで、被害者は相手とのコミュニケーションを、最初から放棄している。五幕まで遠々と続けられる両者の議論は、一言でいえば、水かけ論であり、歩み寄りの余地はどこにも存在しない。言葉は、彼らが己れの立場を固持し、都合のよい口実を並べたててる方便にすぎない。このことは、Suréna や Eurydice についても、例外ではない。二人が、Orode, Pacorus に抗弁する三幕二場および四幕三場を読めば、彼らの説くもっともらしい理屈が、それと全く別の目的を秘めていることは、一目瞭然であろう。

#### (4)

《Suréna》を動きの乏しい、一種の受難劇とした原因は幾つか考えられる。先に述べた、ストーリーの密室性とそれに伴う場面構成の単純さも重要な要因である。しかし、究極的には、この劇で示された、閉鎖された世界観

が、最大の原因として挙げられよう。つまり、国家や家族という共同体的価値は信じるに価しない。偽りでないのは、男女の恋愛だけだという認識である。そして、世界に対するこの不信の裏づけとして、ベジスティックな今一つの認識が、作品を一貫している。嫉妬こそ人間の心に巣くう根源的な感情であり、とりわけそれが権力者の胸に宿った時、いかなる抵抗も無駄である。この認識に従って、主人公達は、一切の外的行動に訴えることを放棄する。死を覚悟することで、彼らの最後の誇りを守ろうとする。このような彼らの精神主義的な態度を、美しいと評価するか、観念論的で現実離れしていると考えるかは、今ここでは論じない。

いずれにしても、いかにも楽天的ヒロイズムを謳歌したかにみえる *Corneille* の悲劇は、皮肉にも、最もベジミズムに満ちた作品を生み出して終るのである。

[ 注 ]

- 1) Cf. P. Corneille: *Théâtre complet de Corneille*, Garnier, 1971, t. 3, p. 698.
- 2) Cf. R. Picard: *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1961, p. 221.
- 3) Cf. G. Couton: *La Vieillesse de Corneille*, Moline, 1949, p. 217.
- 4) Cf. P. Corneille, *op. cit.*, p. 698.
- 5) *Suréna*, IV, 4, 1355.
- 6) Cf. *ibid.*, III, 2, 896.
- 7) *Ibid.*, I, 3, 277.
- 8) *Ibid.*, IV, 4, 1309-1312.
- 9) *Ibid.*, I, 3, 301-304, 309-312.
- 10) *Ibid.*, IV, 4, 1357.
- 11) Cf. *ibid.*, I, 3, 321-328.
- 12) *Ibid.*, IV, 2, 1107-1108.
- 13) Cf. *Sophonisbe*, I, 2, 135-140. *Tite et Bérénice*, IV, 1, 1125-1132.
- 14) *Suréna*, IV, 2, 1569-1572.
- 15) *Ibid.*, IV, 2, 1555-1557.
- 16) *Ibid.*, V, 1, 1408.
- 17) *Ibid.*, IV, 4, 1380.
- 18) *Ibid.*, IV, 2, 1123-1124.
- 19) *Ibid.*, II, 3, 615-619.
- 20) Cf. *ibid.*, III, 2, 881-900, 921-926, 937-940.

21) *Ibid.*, III, 1, 723–726.

22) *Ibid.*, III, 1, 727–730, 737.

23) Cf. S. Doubrovsky: *Corneille et la dialectique du héros*, Gallimard, 1963, pp. 455–456.

24) *Suréna*, V, 2, 1509–1515.

25) *Ibid.*, V, 3, 1637–1642.

## *Suréna* de Corneille

Nobuya MURASE

*Suréna*, la dernière pièce de Corneille, est une tragédie monotone; on dirait qu'il s'agit d'une élégie. *Suréna*, général d'Orode qui est roi des Parthes, triomphe des Romains à Carrhes mais se fait assassiner par le roi. Car il refuse d'épouser sa fille; le roi s'inquiète de laisser indépendant un sujet aussi puissant que *Suréna*.

Ce qui nous frappe, c'est que cette injustice ne provoque chez lui aucune résistance et qu'il accepte la mort avec calme. Stoïque, le héros se contente de mépriser en lui-même celui qui le persécute. Il ne fait aucun effort pour essayer de préserver sa vie. La monotonie de la pièce provient sans aucun doute de la passivité de son attitude.

Pourquoi a-t-il perdu toute envie d'agir? D'abord, en tant que sujet loyal, il ne veut pas se rebeller contre le roi, même si celui-ci se montre injuste. Sa fidélité à l'absolutisme, si l'on me permet cet anachronisme, l'empêche de passer à l'action. Mais, il n'en reste pas moins que, comme nous l'avons dit, il méprise au fond de son cœur le roi Orode et ne croit guère la raison d'Etat qu' invoque celui-ci.

En second lieu, cette passivité résulte peut-être du pessimisme du héros. Sa lucidité abolit chez lui l'échelle des valeurs qui animent Rodrigue, Horace ou Polyeucte: l'honneur de la famille, la raison d'Etat, la religion qui s'appuie sur la croyance à la vie éternelle ne l'enthousiasment plus au point de risquer allègrement sa vie pour eux. Le héros qui est en un sens un individualiste trouve donc que son amour pour *Eurydice* est la seule chose qui compte.

Son pessimisme profond l'oblige à affronter les aspects les plus sinistres du cœur humain: la férocité de la jalousie qui peut déterminer presque toutes les actions d'un homme. En apparence, la tragédie de *Suréna* semble provenir de son choix volontaire: il choisit de se sacrifier à l'amour plutôt

que d'accepter un mariage de raison. Mais, en réalité, il n'y a pas d'alternative. C'est la jalousie du roi qui entraîne le dénouement tragique et non pas le choix du héros. Suréna dit à Eurydice: "*Madame, ce refus n' est point vers lui (= le roi) mon crime: / Vous m'aimez; ce n' est point non plus ce qui l'anime. / Mon crime véritable est d' avoir aujourd' hui / Plus de nom que mon roi, plus de vertu que lui; / Et c'est de là que part cette secrète haine / Que le temps ne rendra que plus forte et plus pleine./ Plus on sert des ingrats, plus on s'en fait haïr.*" Si la jalousie du roi est si intense, il est inutile d' essayer de se réconcilier avec le roi. C'est ce qui explique l'attitude passive du héros. On peut dire que la monotonie élégiaque de *Suréna* est causée par un pessimisme qui reflète peut-être celui du vieux dramaturge.